

実践ノート

看図アプローチ体験教材「江別冬景色」の作成

鹿内信善¹⁾・織田千賀子²⁾

SHIKANAI Nobuyoshi ODA Chikako

キーワード：看図アプローチ・コンピテンシー・教材開発・発問づくり・雪国の暮らし

1. 教材作成の経緯

2026年1月下旬、札幌・千歳・江別等を含む「道央圏」は記録的な大雪に見舞われました。その様子を、札幌管区气象台は次のように伝えています。

■天気概況

北海道地方は、1月24日から25日にかけて北海道の西海上を小さな低気圧が南下し、石狩湾付近で不明瞭となったが、気圧の谷が残った。このため、石狩湾から石狩平野に帯状となった雪雲が継続的に流れ込み、石狩地方を中心に大雪となった。最大24時間降雪量は、札幌で54cm、恵庭島松で53cmを観測し、1月の1位の値を更新した。また、札幌では4年ぶりに1mを超える積雪深となった。（札幌管区气象台2026年1月26日「気象速報」）

この影響で、道央圏のJRやバスは全面運休となり多くの人が身動きできなくなりました。新千歳空港には約7,000人が滞留し大きなニュースになっていました。私（鹿内）が住んでいる江別市は、上記「天気概況」に書かれている「石狩地方」に位置します。札幌市の隣にある市です。江別市は大雪の中心地ですから札幌以上に交通機関が機能しなくなっていました。私は、自宅以外にマンションを借りて「看図ラボ」を開設し、毎日そこで仕事をしています。自宅からバスなら15分程度。JRなら2駅の距離です。わずか2駅

の距離を移動できない「帰宅難民」になってしまいました。幸いなことに、ラボに寝袋を用意してあったので、それにくるまって一晩過ごしました。ラボにはストーブがあるので厳冬の夜を何とか過ごせましたが、「寝袋とストーブだけでは災害時の寒さ対策としては不十分である」という貴重な学びを得ることができました。ストーブをつければ室温は上がります。しかし、床が冷え冷えなのでその冷気を寝袋の厚みだけでは遮断できないのです。厳冬の災害時に、ラボよりは確実に寒い体育館に避難する場合などを想定して、備えを見直さなければならない、という教訓を体験的に得ることができました。

以上のようなことを掻い摘んで、藤田医科大学の織田千賀子先生に伝えました。そうしたら『『ふじかん』でビジュアルテキストの読み解きに使用したいので江別の雪景色写真を2枚送ってください』というメールが返ってきました。「ふじかん」は「ふじた看図アプローチ研究会」の略称です。織田先生のメールを読んで、私にはピンとくるものがありました。「ハッとさせられた」という表現の方が近いかもしれません。「この雪、この冬景色が教材になる!!」というひらめきが降りてきてくれたのです。それから私は「授業づくりあたま」になって「江別冬景色」の取材を始めました。

私は「授業づくりあたま」という言葉を次のような意味で用いています。

1) 北海道教育大学名誉教授
2) 藤田医科大学

私は、2つの意味をもたせて「授業づくりあたま」ということばを遣っています。/ひとつは、「この教科でこういう能力を伸ばすためにこの写真を使いたい」という明確な目的意識をもつことです。こういう目的意識をもって協同学習ツールとしていかせそうな写真を撮っていきます。それが「授業づくりあたま」になって写真を撮るといことです。

(鹿内 2015, pp.84-85)

今回作成する教材で伸ばしたい能力(コンピテンシー)は「見方・考え方」です。これは、学習指導要領でも強調されているキーコンピテンシーです。小中高教育だけではなく看護教育等の専門教育でも育成が求められていることです。これを、最近よく遣われる言葉で表せば「コンピテンシー基盤型教育」になります。

そして今回、教材とする写真を撮影したり、教材を組み立てたりして、「北国の厳しい冬を乗り切るために、たくさんの人たちがいろいろな工夫をしてくれているのだ」ということに気づかされました。今回の教材づくりの途中から「北国の冬の暮らしを守る仕事を学べる教材にする」という目的・目標も付け加わりました。これは「コンテンツ基盤型教育」になります。最終的には『コンテンツ基盤型教育』と『コンピテンシー基盤型教育』を融合させたワークショッププログラムをつくる」という大きな目標をもって、今回の教材開発を行うことになりました。

「もうひとつの意味は、『その写真を用いて、こういう発問をし、こういう活動を引き出す』という授業の組み立てを考えることです。」

(鹿内 2015, p.85)

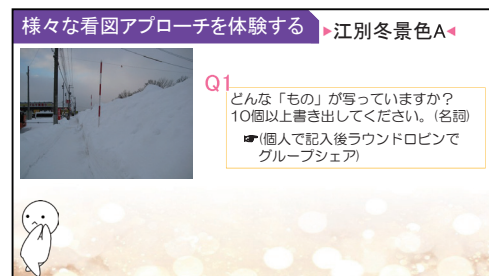
これは私だけかもしれませんが、写真を撮るとき、自然とこういうことを考えて撮っています。ただ、撮影を終えて部屋に戻って写真を眺めているときに「この写真を用いて、こういう発問をし、こういう活動を引き出す」というアイデアが降りてくることもあります。そのようにして撮ってき

た写真と発問を組み合わせたスライドを、解説も加えながら紹介していきます。

II. 「江別冬景色」ワークショップ用スライド及び解説

「江別冬景色」スライドはA・B・Cの3セットで構成されています。

II-1-1 江別冬景色 A



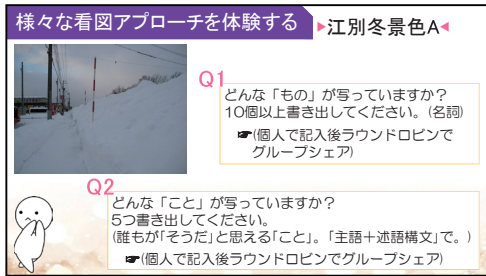
スライド A-1-1

看図アプローチでは「変換」「要素関連づけ」「外挿」という3つの情報処理によって、学習者のビジュアルテキストを「よく見る」活動を促進していきます。スライドA-1-1のQ1は、写真に写っている「もの」を言葉に「変換」する活動を促す発問です。この発問をすると学習者は次のような「もの」を見つけてくれます。ここでは、予備実践のときに織田先生が書き出してくれた「もの」のリストを紹介しておきます。

雪 歩道 雪の壁 除雪の跡 スノーポール
空 雲 電柱 電柱の足場 電柱の街灯
電線 車 看板 屋根 車買取センター
樹木 枝 路肩 窓 除雪の重機? (左の黒のボディにオレンジのガード) 電線の目印?
(黒黄の帯や三角の目印)

実際のワークショップ(以下、WS表記併用)では、参加者にスライドA-1-1の写真を印刷したワークシートを配付します。そのワークシートに、例えば「歩道」とか「雪の壁」とかの名詞を書き込み、写真中の当該箇所と線で結んでもらいます。これを個人思考で行います。全員の記入が済んだら、記入した名詞をひとつずつラウンドロ

ピンによってグループシェアしていきます。自分では気づいていなかった「もの」を、他の人が発表してくれたときは赤ペン等で自分のワークシートに書き足してもらいます。これらの活動が済んだら、スライド A-1-1 上に Q2 を出します。スライド A-1-2 として載せておきます。



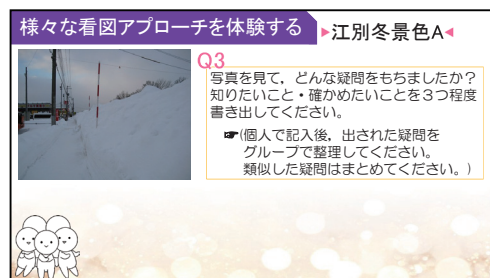
スライド A-1-2

Q2 に対する回答もワークシートに記入してもらいます。記入後にラウンドロビンでグループシェアしてもらうのも Q1 のときと同じ手順です。学習者たちからは「雪が山になっている」「雪にスノーポールが刺さっている」「電線に三角形のものがついている」などの回答が出されます。これらは写真に写っている要素と要素を関連づけることによって生み出される回答です。このような情報処理を看図アプローチでは「要素関連づけ」と呼んでいます。

「ものこと原理」の最後は「外挿」です。外挿とは、簡単に言えば「写真に写っていることを超えて推測すること」です。言葉にすると簡単そうですが、外挿活動を引き出してあげるのはかなり難しい教育操作になります。実際、「看図アプローチでは外挿発問を考えるのが難しい」という感想を届けてくれる先生方は多いです。私たちは「外挿をファシリテートする方法」もいくつか開発しています。ここでは比較的簡単にできる「外挿のファシリテーション法」をひとつ紹介します。次のスライド A-2-1 です

アクティブラーニングを実現する方法として PBL(Problem Based Learning) や探究学習が推奨されています。しかし、PBL や探究学習を教室に導入するためにはいくつかの困難があります。最

初に直面する大きな困難は「問題発見の難しさ」です。PBL も探究学習も、そこに解決すべき「問題」がある、探究すべき「問題」がある、ということが前提になっている授業方法です。にもかかわらず、その「問題」を学習者に主体的に発見してもらうのが難しいのです。教師にとっては「問題を発見してもらうにはどうしたら良いのか」ということが「大問題」になってしまうのです。しかし看図アプローチを活用するとこの大問題がクリアできてしまうのです。ここまで見てきた 1 枚の写真の中には、様々な問題が隠されています。また、「変換」「要素関連づけ」によって学習者たちは「写真をよく見る」ことができるようになっていきます。このため、スライド A-2-1 の Q3 を示された学習者たちは、主体的にたくさんの問題を発見してくれます。たとえば、あるグループは次の問題群を見つけられました。

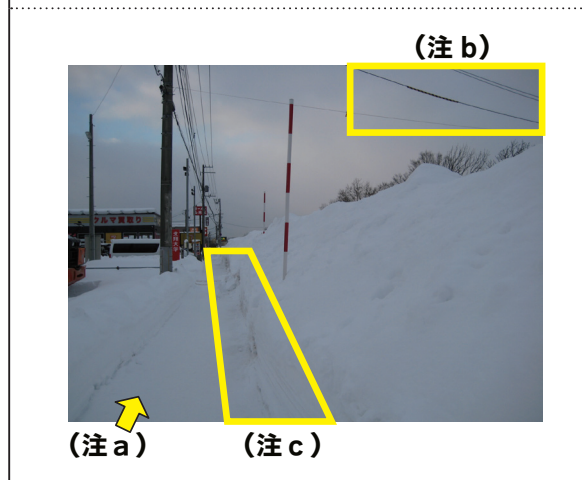


スライド A-2-1

- 車と電柱がつながっている意味は何か
- この先はどんな景色がつづいているのか
- 何センチくらい雪がつもっていてそれは普通くらいなのか
- 「くるま買取り」の看板は中古車屋さんなのか
- 右側の雪のこんもりは除雪によるものか
- 右上の木の高さはどれくらいなのか
- 生活が大変じゃないかな ここで歩いて移動することとか…
- 赤と白のポールは積雪の高さを測るものかどうか
- 車が写っているが運転はどこをどう通るのか
- 奥にある赤い看板はラーメン屋さん山岡屋であるのか

もうひとつのグループが見つけた問題群も紹介します。

- ・道なのか？→歩道 or 車道？（注 a）
- ・線は何？（注 b）
- ・何がある？（注 c）
- ・このかたまりは？どて or 除雪？
- ・朝か夕か？
- ・ポールはなぜあるのか？
- ・この先にもポールはあるのか？
- ・雪の深さは？
- ・雪のないバージョンはどうなのか？



問題の整理が済んだら、それらの問題群についての答えを自分たちの頭で考え出してもらいます。そのための新しい指示をスライド A-2-1 上に出します。新しい指示を加えたスライドをスライド A-2-2 として載せておきます。

様々な看图アプローチを体験する ▶ 江別冬景色 ◀

Q3
 写真を見て、どんな疑問をもちましたか？
 知りたいこと・確かめたいことを3つ程度
 書き出してください。

☑ (個人で記入後、出された疑問を
 グループで整理してください。
 類似した疑問はまとめてください。)

☑ それぞれの疑問に対するもっとも面白い答えを、
 ハズで考えてください。(=外挿・仮説・予測)

☑ その後全体シェア

スライド A-2-2

これは正答を求めさせるステップではありません。「見方・考え方」というコンピテンシーを育むことがこのWSの目的です。そのため問題群を解決するための様々な仮説（見方）を自由に出し

てもらいます。多様な考え方も共有してもらいます。これが写真に写ったことを超えて考える「外挿」活動になります。

看图アプローチでは「多段階動機づけ」が必要であることを強調しています。これまでの一般的な授業は、授業の導入部分での動機づけを重視してきました。しかし1時限の授業をより充実したものにするためには、動機づけの「仕掛け」を次々と繰り出して行く必要があります。このような仕掛けをすることを「多段階動機づけ」と私たちは呼んでいます。

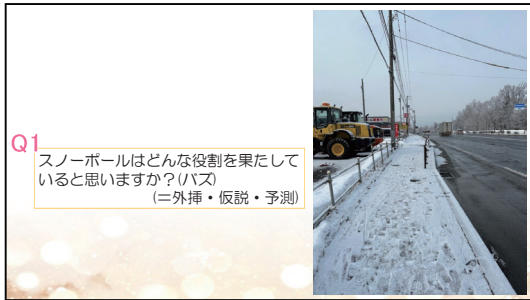
自分たちが見つけ出した問題群の答えを考えてもらうと、その答えの「確からしさ」を知りたくなってきます。この気持ちを動機づけに活用していきます。問題発見のステップで「雪のないバージョンはどうなのか？」のような発言がたいてい出てきます。こういう発言を拾い上げながら確認写真を呈示します。今回は写真1を呈示しました。



写真 1

この写真を見てもうと、学習者たちが見つけてくれた問題のかなりの部分が解決してしまいます。しかし未解決の問題も残ります。例えばスノーポールに関する問題は未解決のまま残される」ということに私はこの教材を作っている段階で気づきました。なぜなら、北海道で何十年も暮らしている私自身が、この教材を作ることによってスノーポールの役割につい

て初めて気づかされたからです。このため、スノーポールについて深掘りするスライドをあらかじめ作成しておきました。スライド A-3-1 です。

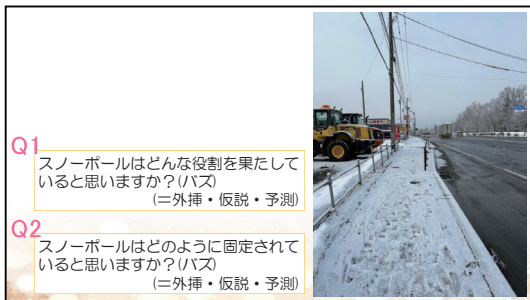


スライド A-3-1

この進め方は、授業者による「問題提案型看図アプローチ」になります。ちなみにスライド A-2-2 は、学習者による「問題発見型看図アプローチ」になります。

学習者の手元には積雪時の写真がワークシートとして残されています。学習者はそれと写真 1 を比較しながらスノーポールの役割を自由に考えていきます。このステップでも正答は求めません。学習者は、写真に写っていることを超えた「外挿」活動をするようになります。

Q1 についてのグループでの話し合いの進み具合を見て、スライド A-3-1 上に Q2 を出します。それをスライド A-3-2 として載せておきます。



スライド A-3-2

Q2 についても自由に話し合ってもらいます。この問題には「正答」があるのですが、その正答が学習者たちから出てくることはまずありません。「正答」を江別のまちのあちこちで見つけることができるのに私自身がそれに気づいていませんでした。Q2 についても予測（予想）してもら

うと、その予測の確からしさを確認したくなります。看図アプローチではこれを「予測－確認の原理」として動機づけに活用しています

写真 1 ではスノーポールがすでに片付けられています。この写真を撮ったのは 3 月ですから、あちこちで冬装備の撤去が始まっています。しかし江別市の中心部である野幌駅周辺には固定されたスノーポールがまだ残っていました。3 種類の固定法があることがわかりました。スライド A-3-2 の Q2 までの活動によって学習者たちはスノーポールの固定法を知りたくなっています。そこで 3 種類の固定法を見せて確認してもらいます。いずれも、除排雪時に構造物を保護するための目印となるようにスノーポールを固定しています。(スライド A-4-1, A-4-2, A-4-3・A-4-4)



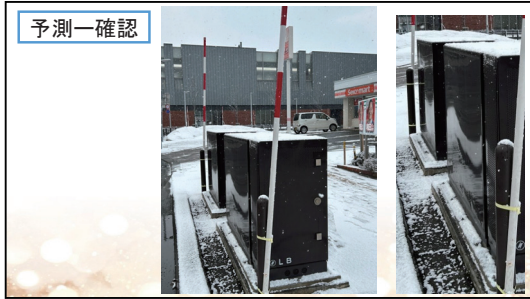
スライド A-4-1

これは構造物に直接縛り付ける方法です。



スライド A-4-2

歩道の縁石やモニュメントのように、直接縛り付けることができない構造物の場合は穴のあいた台座を用意しそれにスノーポールを挿し込みます。



スライド A-4-3

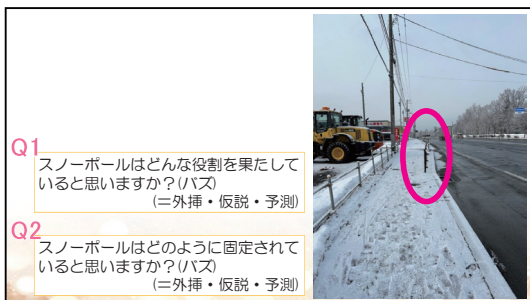
大型の構造物にはスノーポールを縛り付ける支柱が設置されているものもあります。



スライド A-4-4(石田ゆき撮影)

大型の構造物でも支柱が設置されていない場合は、このように直接縛り付けます。これは、スノーポールの撤去をしているときの写真です。

ここまで確認したら、スライド A-3-2 の Q1 と Q2 についてももう一度考えてもらいます。スライド A-3-2 を再掲します。



スライド A-3-2 (再掲)

冒頭で雪に埋もれた風景を見てもらいました。あの大量の雪が自然に融けてこの風景が生まれたわけではありません。除雪の他に排雪という作業も行われます。除雪や排雪時に構造物を壊さない工夫が必要です。冒頭の冬景色写真に写っていた

2本のスノーポールはその工夫のひとつなのです。スライド A-3-2 中の写真の赤丸で囲んだ部分に柵（構造物）があります。その柵の両端にあのスノーポールが縛り付けられています。そして冬の間ずっと構造物を保護してくれているのです。

II-1-2 「江別冬景色 A」実施上の留意点

本稿では「アイスブレイク」の紹介を割愛しています。実際には「きゅうちゃん」を活用したアイスブレイクを WS の初めに行っています。看图アプローチによるアイスブレイクの仕方については鹿内 (2015) が、「きゅうちゃん」を活用したアイスブレイクは石田 (2025) が参考になります。

WS や授業中のスマホの活用についてもルールを決めておいた方が良いでしょう。たとえば WS 中に「スノーポール」のような聞き慣れない言葉が出てくると、すぐにスマホで検索し始める学習者がたくさん出てきます。やはり、WS 中はスマホの使用を控えるというルールを確認しておいた方が良いでしょう。なぜなら、この WS の目標が「自分の頭で考える」コンピテンシーを育成することにあるからです。しかも、スマホを使ったとしても正確な情報にたどり着けないことも結構あります。その例も紹介します。

次の、写真 2 を貼り付けて Copilot に質問してみました。



写真 2

Copilot への質問

スノーポールが括りつけられている茶色い四角い箱状のものはなんというものですか？電気関係ですか？

Copilot からの回答

結論：あの“茶色い四角い箱”は、電気設備ではなく、スノーポールを固定するための「支柱用基礎ブロック（コンクリート基礎）」である可能性が最も高いです。

これは、思わず吹き出してしまうレベルのトンでもない誤回答です。「見方・考え方」は自分たちの頭を使うことによってしか育ちません。

II-2-1 江別冬景色 B

ここからは「江別冬景色 B」を紹介していきます。進め方は「江別冬景色 A」とほとんど同じです。まず写真を呈示します。写真はワークシートにもして配付します。Q1・Q2の発問によってその写真を読み解いてもらいます。Q1・Q2は継時的にしていますが、ここでは1枚のスライドにまとめておきました。スライド B-1-1 です。

様々な看図アプローチを体験する ▶ 江別冬景色 B ◀

Q1 どんな「もの」が写っていますか？
10個以上書き出してください。(名詞)
☑ (個人で記入後ラウンドロビンでグループシェア)

Q2 どんな「こと」が写っていますか？
5つ書き出してください。
(誰もが「そうだ」と思える「こと」。「主語+述語構文」で。)
☑ (個人で記入後ラウンドロビンでグループシェア)

スライド B-1-1

Q1・Q2に取り組んでいる様子が写真3です。今回は電子ボードや書画カメラを活用していますが、これらの機器がなくても大丈夫です。写真を印刷したワークシートを活用するだけでも十分な効果が得られます。写真は参加者全員の承諾を得て撮影しています。「モザイク不要」の承諾も得ていますが、念のためモザイクをかけておきました。

この次の展開も「江別冬景色 A」と同じです。展開の仕方を1枚のスライドにまとめておきます。スライド B-1-2 です。



写真3

様々な看図アプローチを体験する ▶ 江別冬景色 B ◀

Q3 写真を見て、どんな疑問をもちましたか？
知りたいこと・確かめたいことを3つ程度書き出してください。
☑ (個人で記入後、出された疑問をグループで整理してください。類似した疑問はまとめてください。)

☑ それぞれの疑問に対するもっともらしい答えを、パスで考えてください。(=外挿・仮説・予測)

☑ その後全体シェア

スライド B-1-2

「江別冬景色 A」と「江別冬景色 B」はまったく同じ組み立てです。しかし、雪国の暮らしに馴染みのない学習者たちには「江別冬景色 B」の写真を読み解くのは難しかったようです。そこで、「江別冬景色 A」のときより少し早めに「問題提案型看図アプローチ」に切り替えました。スライド B-1-3 です。

様々な看図アプローチを体験する ▶ 江別冬景色 B ◀

Q1 なぜ、幹線道路(国道)ではなく生活道路(支道)の方の雪が融けているのだと思いますか。
☑ (個人思考後、ラウンドロビンでグループシェア)

スライド B-1-3

車がたくさん走っている道路は国道12号線。北海道の大幹線です。そして、手前の雪のない道は住宅地・文教地区につながる支道です。幹線道路ではなく支道の方の雪が丁寧に取除かれています。これはどうしてなのでしょう。

その理由を考えてもらうための発問がスライド B-1-3のQ1です。その理由が写っているのが写

真4です。国道12号線側から撮った写真です。ここは坂道になっているのです。



写真4

私がこの教材を準備しているとき、この写真を見て「ここが坂道だ」ということを誰にでもわかる言葉で説明することが難しく感じられました。そこでWSに参加した学習者たちにも「ここがどうして坂道だと言えるのか」質問してみました。それがスライドB-2-1です。



スライドB-2-1

学習者たちも苦労していたので、私が教材研究中に見つけた説明方法を学習者たちにも体験してもらおうことにしました。

まず、写真5中の3つの線に注目してください。マンションの窓枠の線とその下に映っている倉庫の屋根の線です。これら3本の線は、遠近法の原理にしたがって少し傾いています。3本の線を写真の右方向に伸ばしていくとどこかで交わります。この交わる点を「遠近法の消失点」と呼びます。そこで発問です。「この3本の黄線を写真右方向に伸ばしていくと、写真上のどのあたりで交わるでしょうか？」



写真5

この発問をするとほとんどの学習者は、次の写真6上の「×」のあたりを予想してくれます。



写真6

ところが、なのです。この3本の線を伸ばしていくと意外なところで収束するのです。教材研究をしているときに、私はこのことに気づきました。そして「えー!?!」と思いました。この分析結果を知った学習者たちの多くもやはり「えー!?!」と言ってくれました。



写真7

次に、もうひとつ遠近法の原理を使った分析をしてみます。(写真8)



写真8

停車している車の屋根の線と床の線に注目します。この2本の黄線を写真右方向に伸ばしていくと次のようになります。(写真9)



写真9

車から引いた遠近法の線と、建物から引いた遠近法の線を重ねると次のようになります。(写真10)



写真10

つまりこれは「遠近法の消失点」を2つもっている写真なのです。マンションや倉庫などは水平を保って建築されます。このためこれらの建物から引かれた線は「水平のベクトル」を表しています。一方、車から引かれた線は、水平のベクトルと交差して上昇していきます。これはこの車が斜度のある場所に停車していることを意味します。つまりこの道は「坂」なのです。写真9では、車から引いた線が路面よりかなり上で交差しています。これは、この坂が上の方で少し平坦になっているためです。

坂のない完全に平坦な場所の写真も遠近法の原理で分析してみます。次の写真です。見事な遠近法を読み取れます。「遠近法の消失点」もひとつだけです。(写真11)



写真11(石田ゆき撮影)

ワークショップ「江別冬景色B」のもともとの問題は「幹線道路ではなく支道の方の雪が融けているのはなぜなのか?」でした。その答えは「この支道が坂道だから」になります。北海道の冬道は簡単に圧雪やアイスバーンになります。坂道がそのような路面状況になると車は必ずスリッします。停車することができません。事故を防止するためにこの道路はロードヒーティングされています。24時間通電することで路面の雪を融かしているのです。

II-2-2 「江別冬景色 B」 実施上の留意点

「江別冬景色 B」では、遠近法を活用して写真を読み解くという、看図のための新しい方法を学ぶことができます。「えー!？」と思わせる仕掛けも取り入れやすいです。「雪国の暮らしを守る工夫」についても学ぶことができます。コンピテンシーの獲得もコンテンツの学びも、ともに可能にする教材になっています。

私(鹿内)は「江別冬景色 B」を、ふじた看図アプローチ 31 回研究会で実施してみました。そのときに「ロードヒーティングという言葉初めて聞いた」と言う方が何人かいました。雪国の暮らしに関する知識がほとんどない方にも対応できるよう、スライド構成やファシリテーションの仕方にもう少し工夫が必要です。

II-3-1 「江別冬景色 C」

学習者が慣れてきたら、「変換」「要素関連づけ」を省略して「外挿発問」から始めることもできます。「江別冬景色 C」では「外挿発問」から始める「問題提案型看図アプローチ」を紹介します。「江別冬景色 C」は第 2 筆者(以下、織田先生)を学習者役にして綿密な予備実践を重ねたうえで構成しました。

「江別冬景色 C」では、同じようなアングルで撮影した情報量の異なる写真を複数枚用意しました。どのくらいの情報量が学習者の考えを引き出しやすいか調べてみる、という目的もあります。最初の写真はこちらです。(写真 12)



写真 12

「外挿発問」は、学習者に「えっ」と思ってもらえるような意外性のあるものを用意します。今

回「外挿発問」は「風はどちらから吹いてくるのでしょうか?」です。この写真にこの発問を付けて送ったら、織田先生からは次のような読み解きに戻ってきました。なお、織田先生を学習者にした予備実践はすべてメールで行っています。

織田先生による写真 12 読み解き 1 回目

画面左から右に風が、吹いている。

理由は、画面中央より少し左の斜めの太い枝 3 本に、雪がベターと枝の左側に貼り付いている。それは、風により雪が枝に当たって付着した。風上側反風下側は、雪が落ちやすい。上の方の細い枝群にも右側に雪が着雪している。右寄りの細く長い L 字のような枝は、風が当たらず着雪している。

このステップも学習者には「正解」を求めています。「見方・考え方のコンピテンシー」を育むことが目的ですから、織田先生の根拠を挙げながらの読み解きは理想的な回答になっています。数日後、織田先生は、別な読み解きを自発的にレポートしてくれています。

織田先生による写真 12 読み解き 2 回目

前回、手前の枝が左に傾いているので、「単純に右から左というわけではない」と考え、木の幹を見ると、左側に雪が帯状に貼り付いているから「左から右」なのか? と考えを巡らせました。しかし、「風はどちらから吹いてくるのでしょうか?」と過去ではなく、未来を問うています。

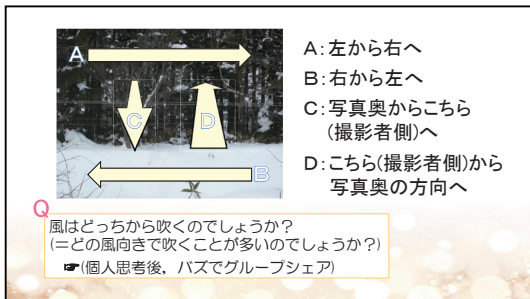
写真撮影時は、雪は降っていません。したがって、「北西の季節風(左からの風)」が吹き付けた名残りを見えています。これは風下側に雪が残るため、雪が降っていた当時は「画面左から右」、つまり北か北西の風であったことが読み取れます。

しかし、現在は雪が止んでいます。一般的に、雪が止んで天候が回復するときは、風向きが北西から西や南へ変わることが多いため、現在の風は「画面の右→左」もしくは「手前→奥」

から吹いていると推測されます。さらに、手前の枝が左側に傾いていることを考慮し、「画面の右→左」と考えます。

このレポートからも、織田先生は写真12とそれにつけられた発問から、多様な見方・考え方を展開してくれていることがわかります。写真12と発問のセットは看図アプローチの良い教材になると思われます。

織田先生は2回目のレポートで「しかし、『風はどちらから吹いてくるのでしょうか?』と過去ではなく、未来を問うています。」と書いています。織田先生は、発問の「時制」も見方・考え方の手がかりにしてくれています。これも素晴らしいコンピテンシーです。実際のWSには多様な人が参加します。発問の時制の解釈をあまり揺らさないように、実際のWS用スライドでは発問に()書きで注を付けておきました。また織田先生のレポートを参考にして、風の吹く方向を4つの選択肢にして、言葉と矢印で示しておきました。それがスライドC-1-1です。



スライド C-1-1

次は写真13です。



写真13

この写真と一緒に呈示する発問は写真12と同じです。写真13は写真12より情報量が増えています。増えた情報を織田先生は次のように読み解いています。

織田先生による写真13読み解き

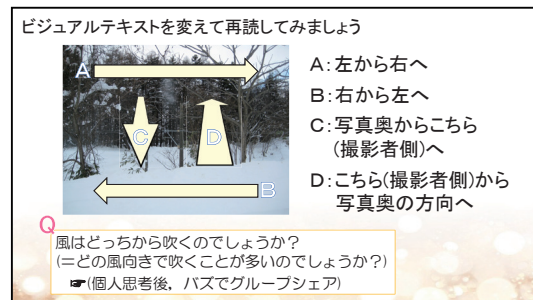
風は、右から左へと流れています。

手前の電柱の足元にある笹の葉や細い枝に注目すると、雪の重みだけでなく、葉先が全体的に画面の左側へなびき、傾いています。

画面中央に雪煙のようなモヤが、右から左へ流れるように見え、画面左側も雪煙のように、雪が舞い上がっているように見えます。画面の右側にはそのようなモヤがないです。さらに、右側は青空が見えます。雪雲が抜けて晴れ間がみえてきていると思います。

「雪煙のようなモヤ」を見つけているところがヒットです。木の高いところに積もっていた雪の塊が落ちてきたところです。雪の塊は落下しながらたくさんの枝にぶつかり砕け、雪煙になっていきます。その雪煙が風によってこちら側(撮影者側)に流れてきている画像です。それが織田先生には「右から左へ流れるように見え」ています。そういう見え方でもかまいません。

この写真と発問も実際のWSではスライドC-1-2のようにまとめて呈示します。



スライド C-1-2

次の写真が「江別冬景色C」のメインになるものです。(写真14)



写真 14

この写真を受け取った織田先生は、私の予想通りにびっくりしてくれました。その驚きを織田先生は次のようにレポートしてくれています。

織田先生による写真 14 読み解き驚きレポート

私は、左側に雪が帯状に貼り付いているから「左から右」(この考えは変わらない)。
 そして、幹の上の方は、比較的右側に雪があると読みます。
 ですが、最初に目に飛び込んでくるのは電車です。電車に集中し、主役と思いがちなので、見えない「風」が主役なのは、「えっ!？」です。
 この発問は、とても難しいと思いますが、発問によって視線は森の奥に進みそうです。
 まさかの電車には、めちゃくちゃ驚きでした。
 衝撃に近いくらいの揺さぶりでした。
 これまで見てきた静かな雪景色の写真からは、まさかそこに線路があって、あんなに大きな列車が勢よく横切っていくなんて、全く想像がつかせませんでした。
 何本も走るワイヤーが電線にしては多いと気になっていたのが、電車の架線だったのかと納得できました。

これだけびっくりしてもらえたら、教材を作成した私(鹿内)も大満足です。しかも、今回の写真はマイナス7～10℃の厳冬下で撮影してきたものです。手袋をつけているとカメラワークがう

まくできないので何時間も手袋を外していました。そういうことも苦労だと思わずに撮影していたのですが、それでも「苦労が報われた」という表現が似合いそうな「満足感」があります。

この「電車の写真」もWS用スライドにしてあります。スライドC-1-3です。またどの写真もワークシートとして印刷してWSに参加している学習者たちには配付しています。

ビジュアルテキストを変えて再再読してみましょう

- A: 左から右へ
- B: 右から左へ
- C: 写真奥からこちら(撮影者側)へ
- D: こちら(撮影者側)から写真奥の方向へ

Q 風はどちらから吹くのでしょうか?
 (=どの風向きで吹くことが多いのでしょうか?)
 (個人思考後、ハズでグループシェア)

スライド C-1-3

上掲した「驚きレポート」の中にある織田先生の気づき「発問によって視線は森の奥に進みそうです。」もうれしいコメントです。この森が「風が吹いてくる方向」に大きく関係しているのです。この森は「鉄道林」です。ここを走る鉄道を風や雪から守る「防風雪林」です。この林の方から吹いてくる風を弱めてくれます。スライドC-1-4では林の方から風が吹いてきている様子を見て確かめることができます。樹上に積もっていた雪が落ちてかなり大きな雪煙になっています。その雪煙が風によってこちら側に流れてきているところです。



スライド C-1-4

ここから、江別冬景色シリーズ看図アプローチの締めくくりです。写真15は遠近法の説明のところですので出てきました。再掲しておきます。



写真15 (写真11の再掲：パース線なし)

鉄道林は防風・防雪のために大切なものです。それが最近、大規模な伐採が行われました。そして、木々を切り倒した後にCOOPや無印良品ができました。写真には写っていませんがCOOPの右側にはモスバーガーもあります。無印良品の向こうには、これらの商業施設の利用客確保を見込んで住宅開発も進行中です。写真15に写っているところはずいぶんこの間までは緑豊かな場所でした。(スライドC-1-5)



スライドC-1-5

鉄道林をなくしてしまったのこのような大規模開発がどうして可能だったのでしょうか。その理由を織田先生にも考えてもらいました。

この締めくくり部分も実際のWSではスライドC-1-6とワークシートによって学習者には呈示します。そのスライドを載せておきます。



スライドC-1-6

「鉄道林をなくしてしまったのこのような大規模開発がどうして可能だったのか」。この問いに対する答えも織田先生がまとめてくれました。

織田先生のまとめ

本当に大きな土地開発ですね。

今回の写真で目に入ったのは、左側の高架です。2年前に野幌へ伺ったときも高架だったことを思い出しました。あのときは、単に雪で線路が埋もれないと思っていました。

高架にすることで、吹き溜まりによって線路が雪に埋もれるリスクが減り、フェンスによって防風ができる。また、土地開発によって長い店舗が連なるのも、新たな防風になると考えました。

林は、維持管理、人件費も莫大だと思います。土地開発により、大きく変わったことは、「林が風雪を受け止める場所」から、インフラ整備によって「鉄道・車・人の流れを支える場所」になったことだと思います。

的確な読み解きとまとめだと思います。それを確認できるスライドを載せておきます。スライドC-1-7です。



スライドC-1-7(石田ゆき撮影)

広大な林の中で暮らしていた生き物たちはどうなってしまったのか、どうしているのか。それを考えると胸が痛みます。しかし、多くの赤字を抱え、たくさんの路線を廃止しなければならない JR 北海道の経営状況も考えたら、このような大規模開発もインフラ整備もやむを得ないことなのかもしれません。江別冬景色の中に、私たちが生きている社会の大きな矛盾を見つけてしまいました。

Ⅲ. 今後の展開

本稿で紹介した実践は、「コンテンツ基盤型教育とコンピテンシー基盤型教育を融合させる」という目標も見据えながら行っています。看図アプローチはこの大きな問題解決に役立つ可能性をもっています。その可能性を追究していくためのいくつかのアイデアを「実践ノート」としてまとめました。まだまだ試みの段階です。これから、多くの先生方のお力を借りて追実践や新しい実践を重ねていく必要があります。

本稿で紹介した写真やスライドは、全国看図アプローチ研究会会員の皆様には無償で提供することができます。希望される方は第 1 筆者鹿内までご連絡ください。^注

え方を育てる授業デザインー看図アプローチの理論と実践ー』 トリアーデ | TRIADE (電子書籍)

注

ご連絡の際は全国看図アプローチ研究会公式ホームページのお問い合わせフォームもご利用になれます。

<https://kanzu-approach.com/script/mailform/kanzu-mail/>

2026 年 4 月 24 日 受付

2026 年 4 月 27 日 受理

引用・参考文献

石田ゆき 2025 『看図アプローチのための教材デザインー「見ること」でととのう学びのアトモスフィアー』 TRIADE| トリアーデ (電子書籍)

札幌管区气象台 2026.1.26 「令和 8 年 1 月 24 日から 25 日の大雪に関する気象速報」
https://www.data.jma.go.jp/sapporo/bosai/past_kishou/pdf/kishor080126.pdf
(2026 年 4 月 23 日最終閲覧)

鹿内信善 2015 『改定増補 協同学習ツールのつくり方いかし方ー看図アプローチで育てる学びの力ー』 ナカニシヤ出版

鹿内信善・石田ゆき (編著) 2025 『見方・考